

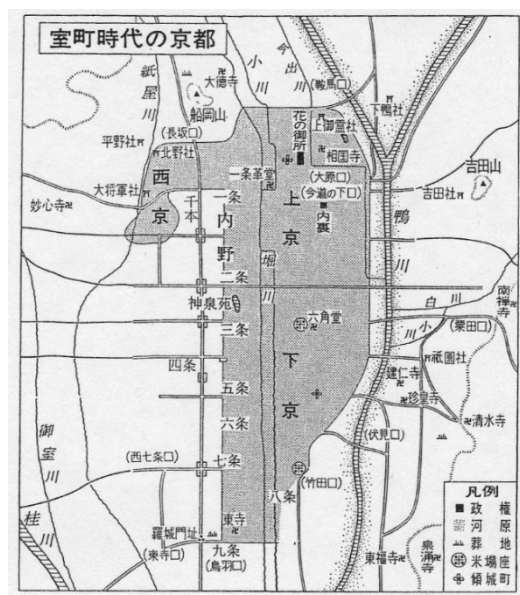


図1-6 室町時代の京都 出典「京都の歴史3」

また、この時代に寺社参詣が庶民の間で流行し始める。

応仁元年（1467）に起こった応仁の乱では、11年にもわたる長期の戦乱によって、京都の市街地は焼土と化し、戦乱により上京、下京のみが都市として存在するようになった。両地域の間には1本の通りが通ずるのみという状況にまで市街地が大幅に減少したが、民衆の力により新しい京都の町が造られていく。町は古代の条坊制とは異なり、道路を挟む両側の家々で構成され（両側町（※1））、御所の西側に発達した商人町から西陣にかけての「上の京」と祇園会の鉾町を中心とする商人町「下の京」の二つの市街地に凝縮されて復興を遂げていった。

応仁の乱を契機に、京の住人は自らの生活を守るため、自治組織を展開させ、16世紀中頃には、内裏周辺の町が集結し六町を結成した。町々の連合体である町組はこの後、下京・上京でも結成され、独自の活動をみせる町組も現れた。

惣町組織も発展をみせ、下京惣町は、応仁の乱により中断されてきた祇園祭を再興し、町衆が祭礼を支えるようになる。

町衆は惣堂に集い、町のさまざまな問題を衆議した。このように、町や町組は、京

※正しくは示（左側＝へん）に氏（右側＝つくり）であるが、本文中の表記は「祇」で統一している。

の民衆の生活の基盤となっていた。

都市は小さくはなったが、この時期には公家・武家・僧侶・諸職人・諸商人などが混在し、諸階層・諸分野

が密接に絡み合う密度の高い都市活動が展開し、凝縮された都市であるがゆえに現代に続く都市文化が熟成された。

また、この時期には、上京と下京に、京都盆地のなかに点在する門前町（上賀茂や西ノ京）や津（淀や伏見などの港）などを加えて、洛中と洛外を一体的にとらえて認識されるようになる。

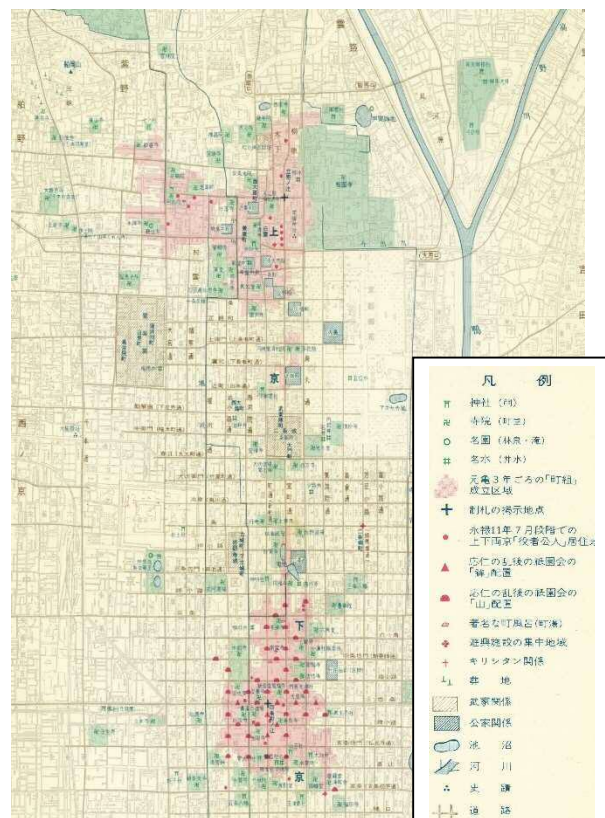


図1-7 応仁・文明の大乱後～天正14年（1586）頃の様子

出典「京都の歴史4」

室町時代の代表的な建造物

この時代の代表的な建造物として、^{じしょうじ}慈照寺銀閣（国宝）、八坂神社楼門（重要文化財）、伏見稲荷大社本殿（重要文化財）などがある。慈照寺（銀閣寺）は、「古都京都の文化財」として世界文化遺産に登録されている。



写真1-6 慈照寺（銀閣寺） 提供 慈照寺